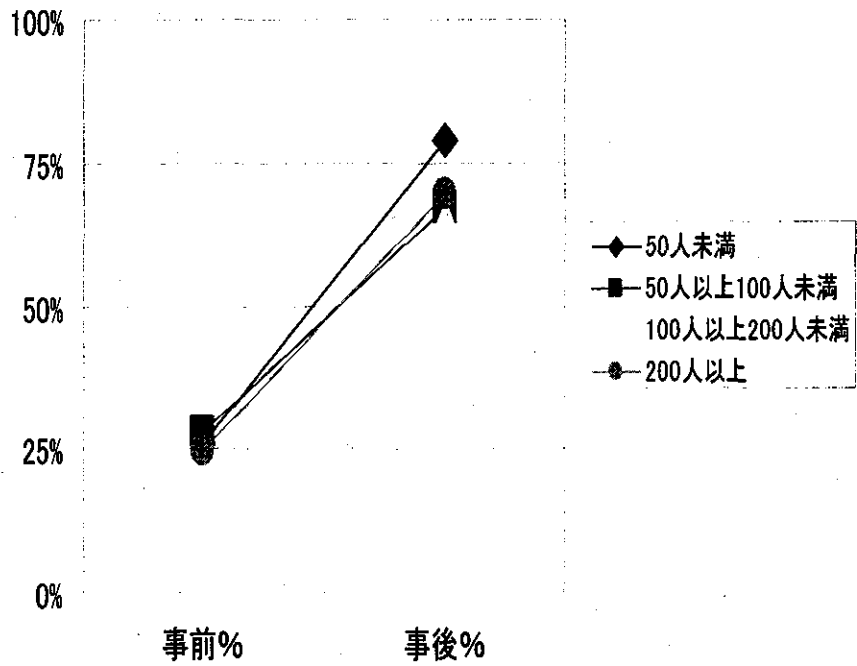
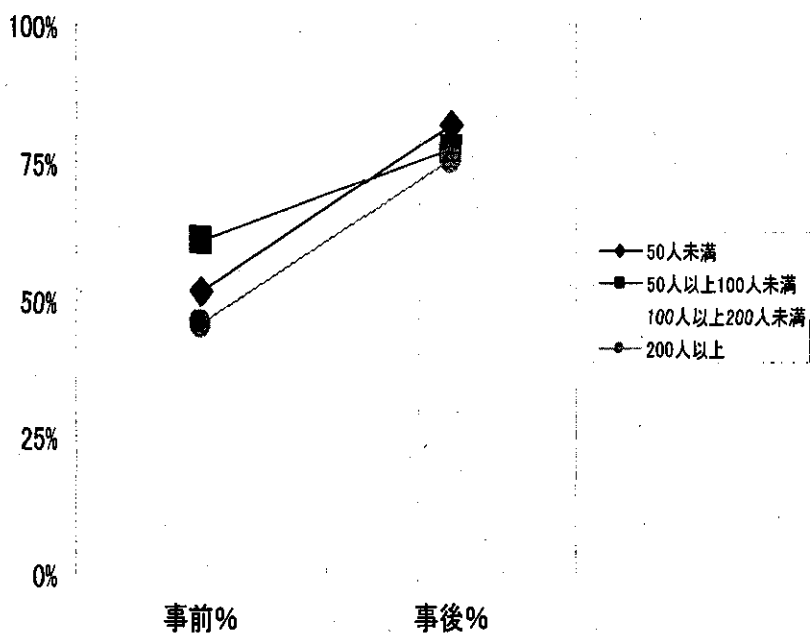


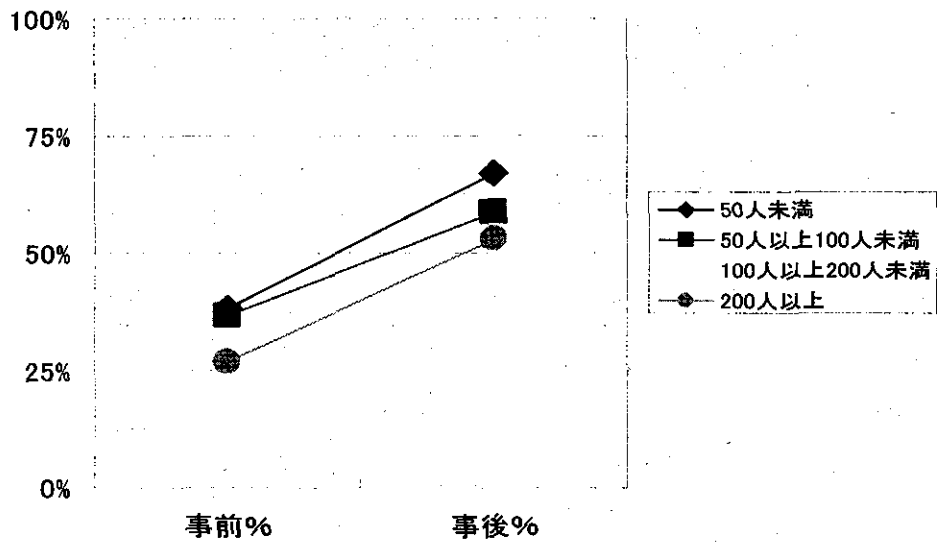
参加者規模別「感染の可能性のある体液」に関する知識の獲得



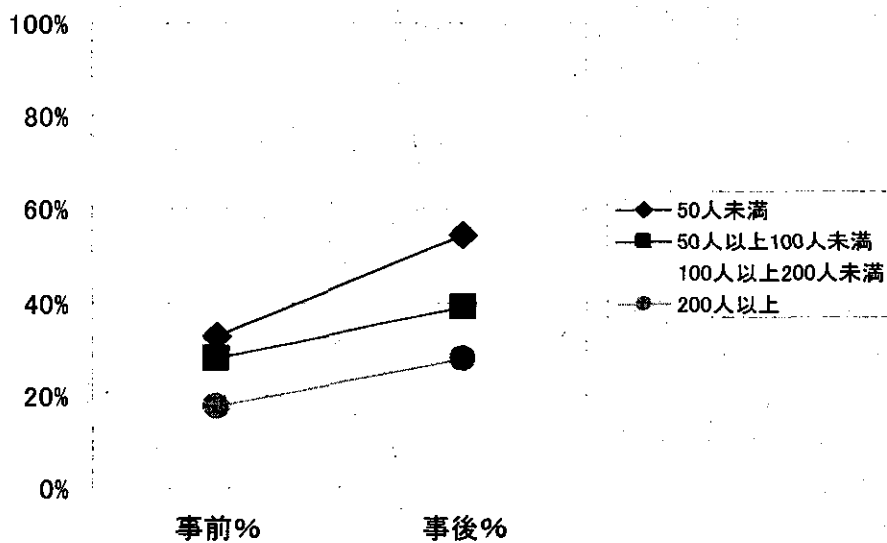
参加者規模別「感染の可能性のある行為」に関する知識の獲得



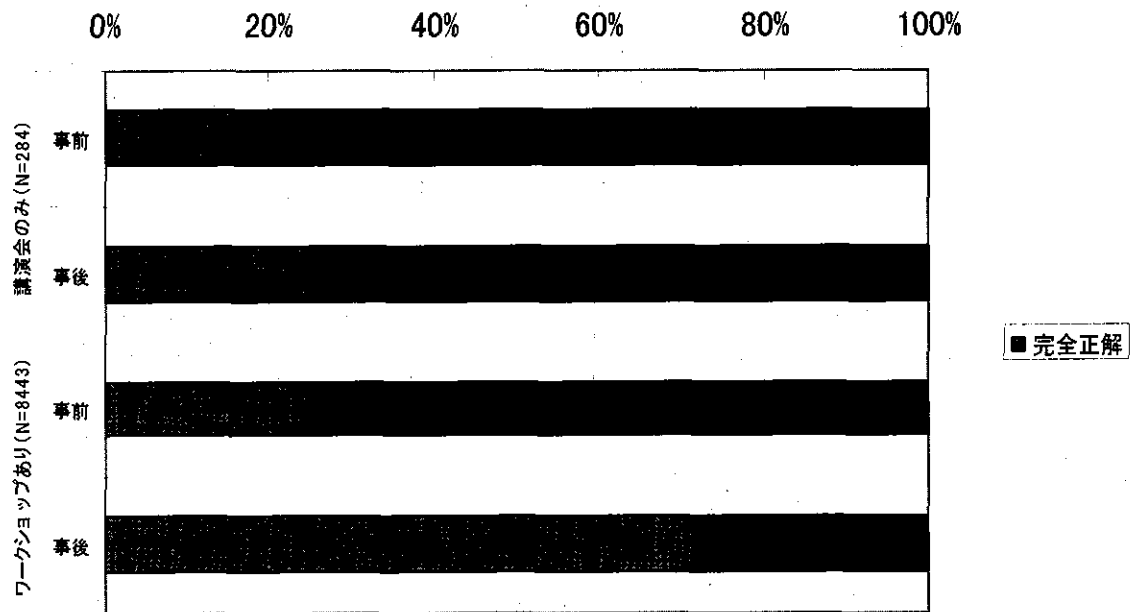
参加者規模別「自分自身の問題」で「はい」と答えた事前事後の比較



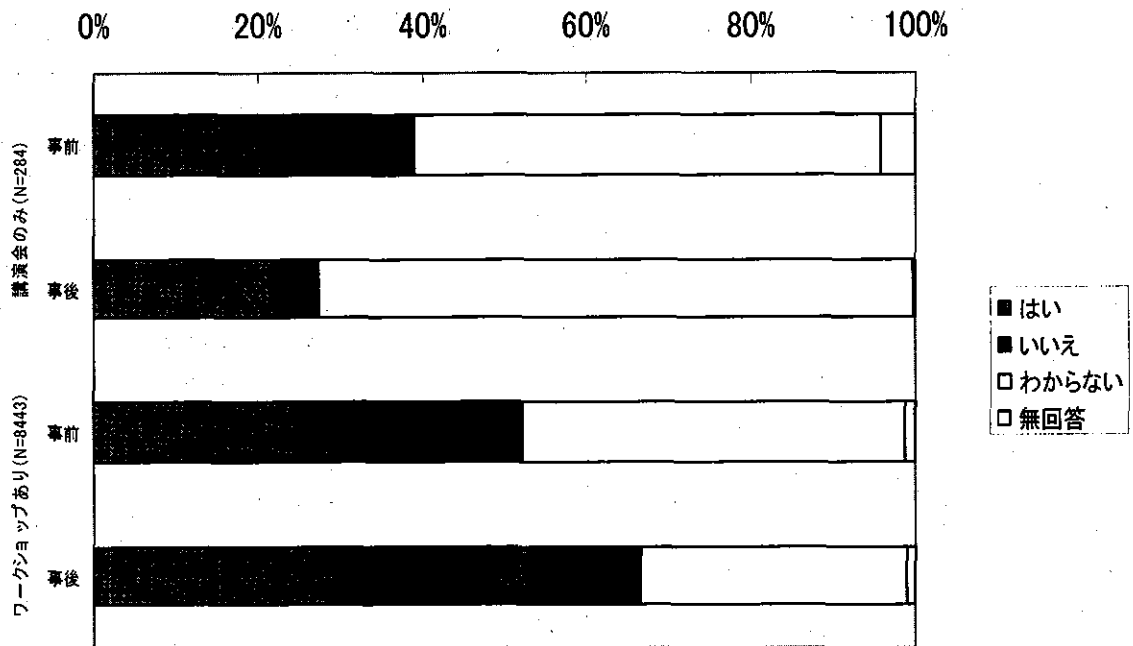
参加者規模別「友人と話したいか」で「はい」と答えた人の前後比較

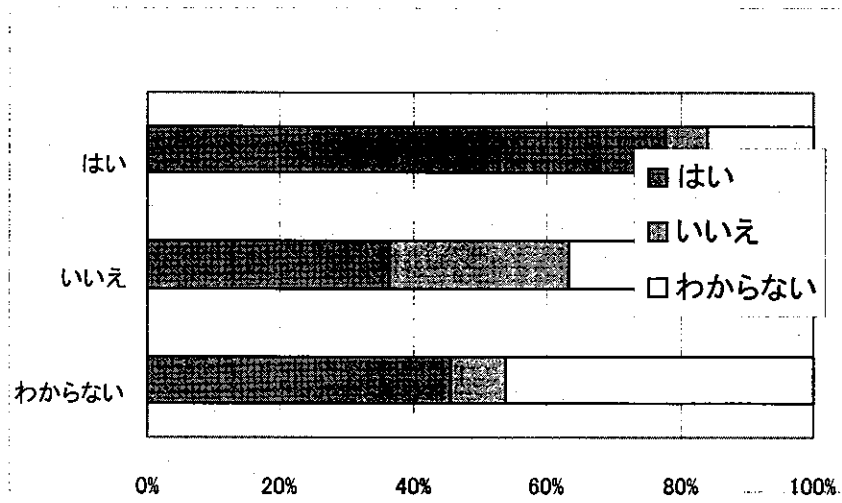
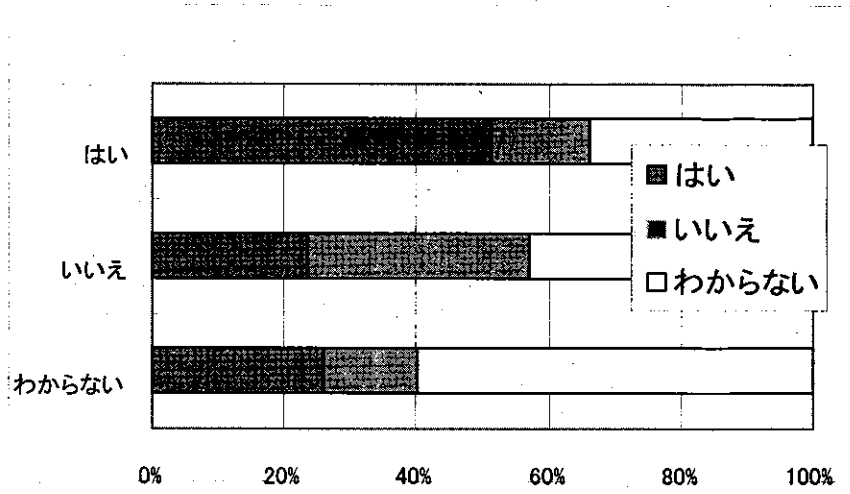


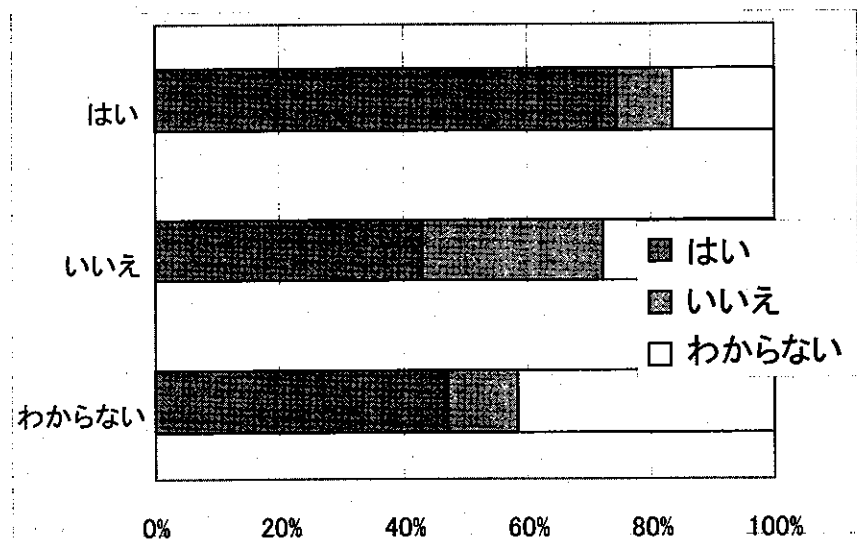
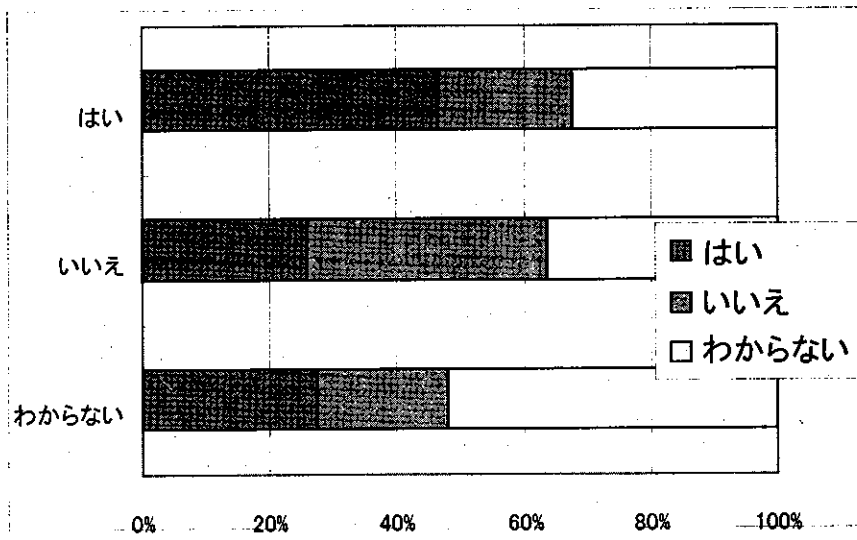
ワークショップの有無から見た感染の可能性のある体液の完全正解率



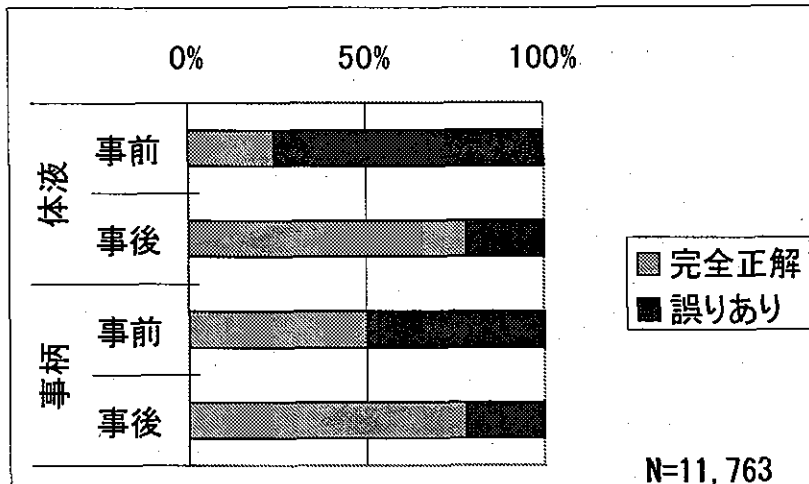
ワークショップの有無とAIDSを自分自身の問題として考えることの関係





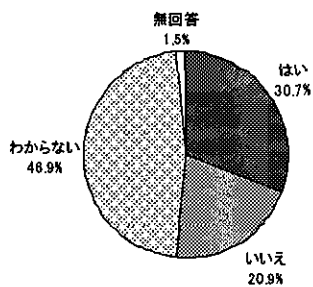


若者相互のAIDS啓発プログラム:事前・事後の変化  
 ~感染に関する知識の完全正解者の割合~

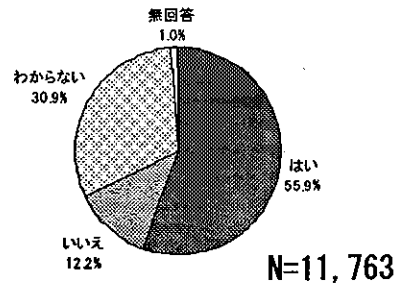


若者相互のAIDS啓発プログラム:事前・事後の変化  
 ~「自分の問題と考える」者の割合~

Q6前 AIDS問題を自分自身の問題として考えられるか



Q6後 AIDS問題を自分自身の問題として考えられるか

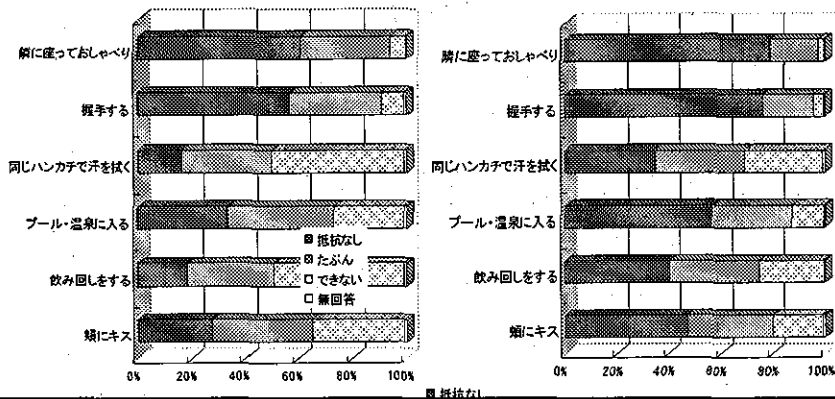


## 若者相互のAIDS啓発プログラム: 事前・事後の変化 ～感染者への共生の姿勢～

N=11,763

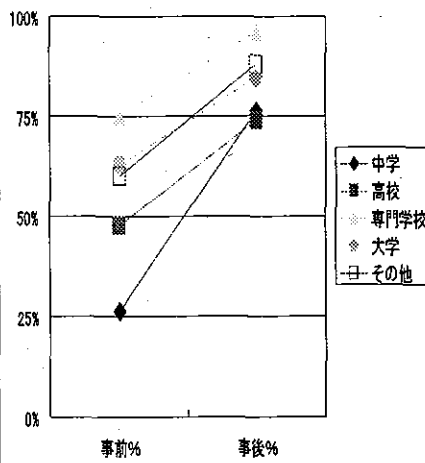
Q9前 身近な人にできること(感染者)

Q9後 身近な人にできること(感染者)

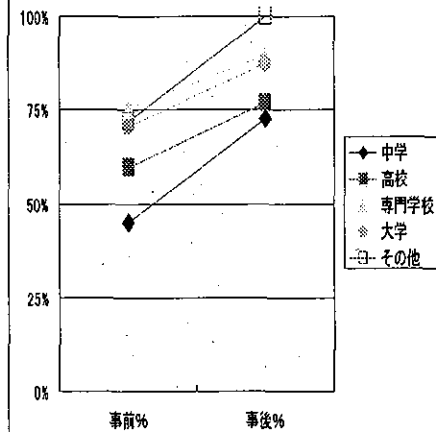


## 教育段階別にみた若者相互の啓発プログラム: 事前・事後の変化

学年別 「感染の可能性のある行為」に関する知識の獲得

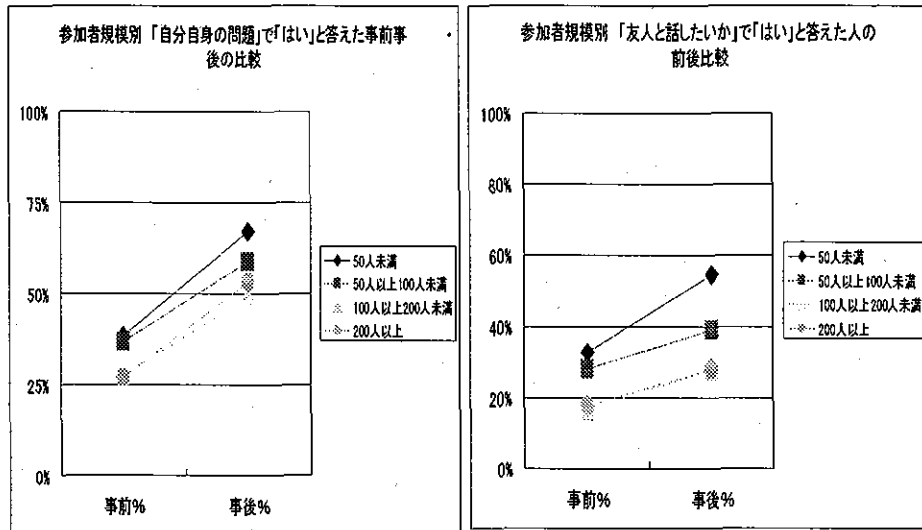


学年別 HIV感染者に対して「握手を出来る」の回答者の割合の変化

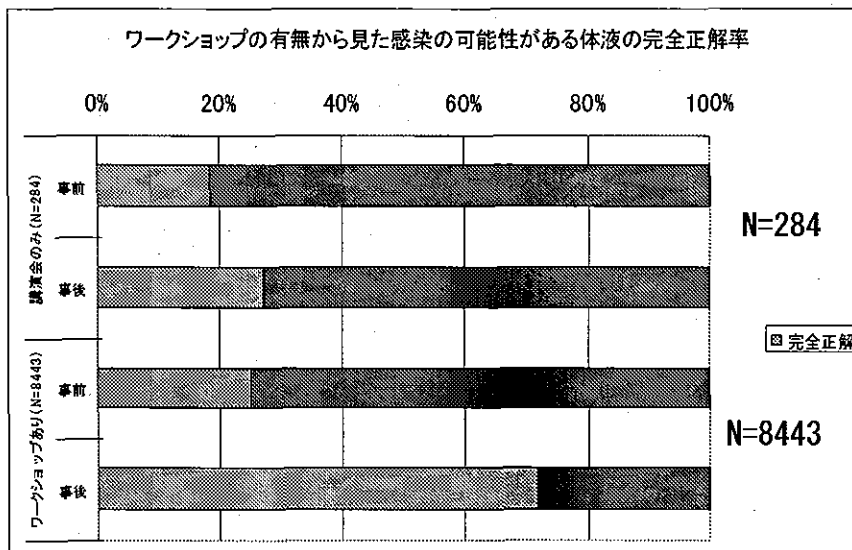


N=5361

## 参加者規模別にみた若者相互の啓発プログラム： 事前・事後の変化

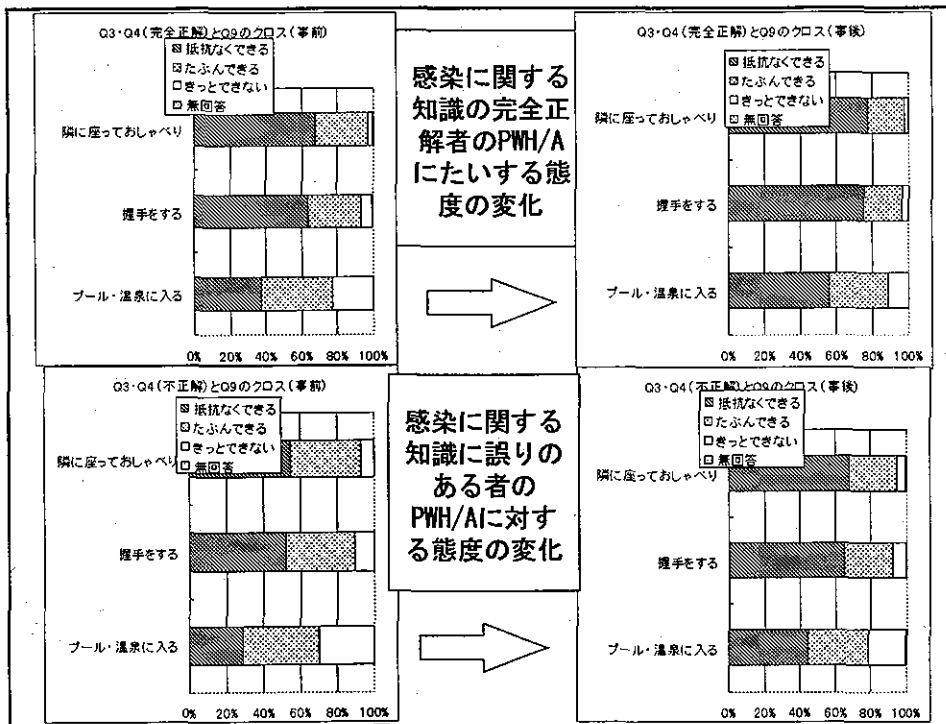
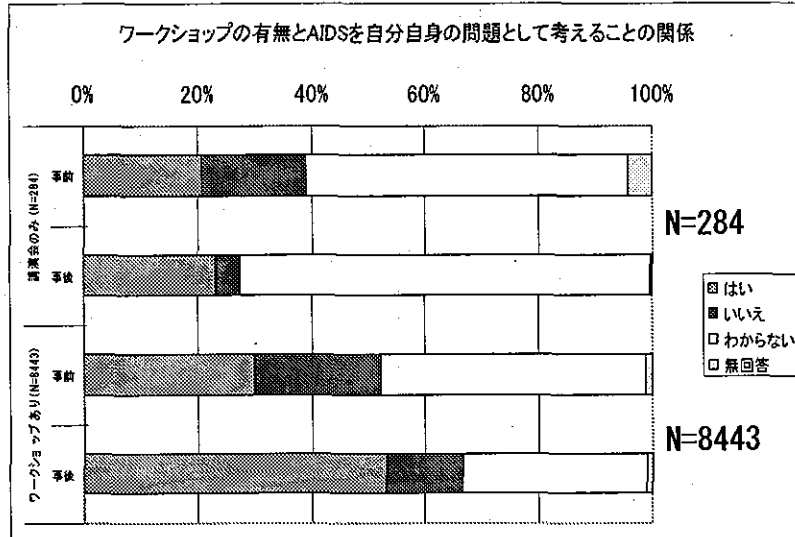


## 高校生を対象にした講演のみによるAIDS啓発と 若者相互の啓発プログラム：事前・事後の変化の比較 ～感染源に関する知識の完全正解者の割合～



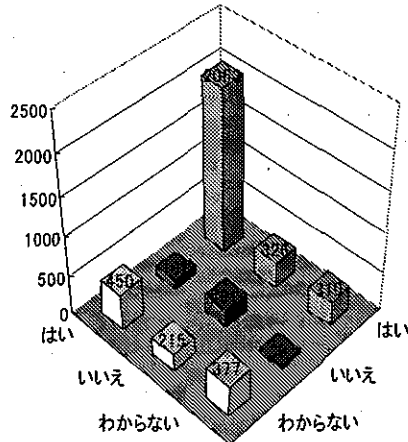


## 高校生を対象にした講演のみによるAIDS啓発と 若者相互の啓発プログラム:事前・事後の変化の比較 ～「AIDSを自分の問題と考える」者の割合～



高校生を対象にした若者相互のAIDS啓発プログラム：  
～エイズのイメージの変化と自尊感情の変化～

□ わからない  
■ いいえ  
▣ はい

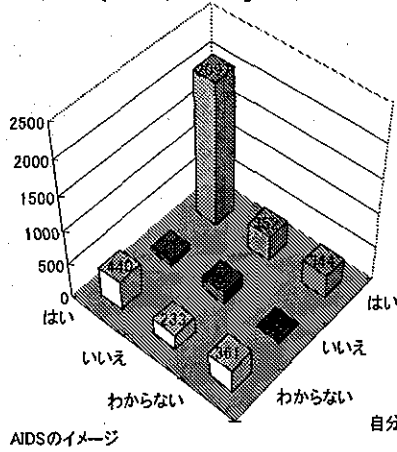


啓発講座後に「AIDSのイメージが変わった」と回答する者には、特に「今回の経験を通して自分のことを今まで以上に考えるようになった」の回答が多かった(N=4138)

自分のことを考える

高校生を対象にした若者相互のAIDS啓発プログラム：  
～エイズのイメージの変化と他尊感情の変化～

「AIDSのイメージが変わった」と答えた者に「今回の経験を通して自分以外の人のことを今まで以上に考えるようになった」者が多かった(N=4138)



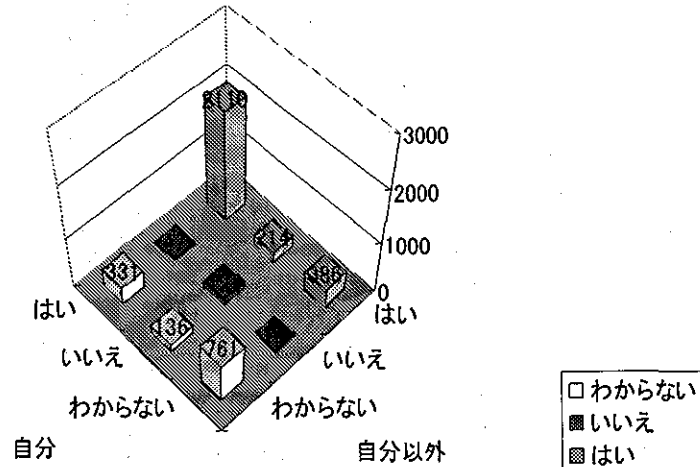
□ わからない  
■ いいえ  
▣ はい

AIDSのイメージ

自分以外のことを考える

## 高校生を対象にした若者相互のAIDS啓発プログラム： ～自尊感情と他尊感情の変化～

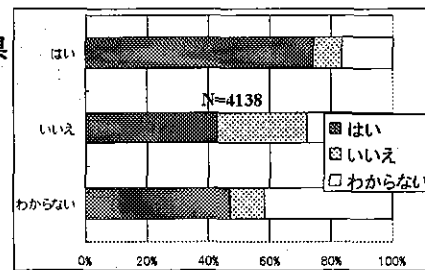
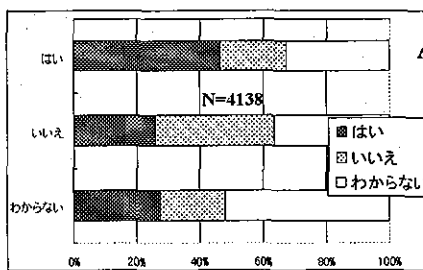
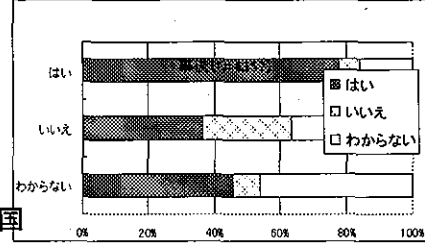
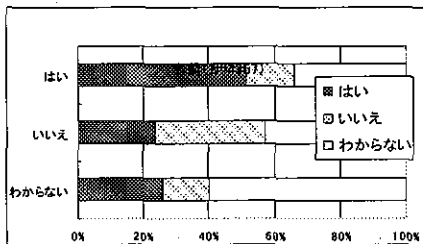
「自分の心や体を大切にしている」と  
「自分以外の人の心や体を大切にしている」の回答に関連あり(N=4138)



## 高校生を対象にした若者相互のAIDS啓発プログラム： 全国とA県の事前・事後の比較 ～エイズや性について「友達と話してみたいか」の回答別にみた エイズを「自分の問題と考える」者の割合の変化～

事前

事後



厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)

分担研究報告書

NGOと教育・保健機関等の連携による若者相互の予防啓発プログラム

(YYSP)におけるワークショップの効果に関する研究 その1

ワークシートの分析による質的調査

- 主任研究者：五島真理為 (特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター 理事長)  
分担研究者：伊藤葉子 (中央大学社会学部 講師)  
新庄文明 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授)  
中瀬克巳 (岡山市保健所 所長)  
橋谷毅 (日本赤十字愛知短期大学 教授)  
守山正樹 (福岡大学学部 教授)  
山本勉 (岡山県立大学短期大学部 教授)  
研究協力者：阿部しのぶ (特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター インターン)  
伊藤麻里子 ((財)エイズ予防財団 リサーチレジデント)  
大郷宏基 (特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター 中部支部)  
川辺伊公子 (四日市保健所 保健師)  
栗原喜代子 (桑名保健所 保健師)  
小林和子 (岡山市保健所 保健師)  
山本昌代 (新宮保健所 保健師)

研究要旨

HIV の感染予防及び人権に関する啓発を国民的レベルですすめるために、NGO・保健所・教育機関の連携のもとに行われる若者相互の啓発プログラム YYSP の評価方法について検討した。とくにその方法として、ワークシートという新しい側面からの若者相互の啓発プログラム YYSP の効果の評価とその評価方法の構築を目的としている。本調査によって、今まで見えにくかったワークショップ形式の効果測定のひとつのかたちを示すことができた。きちんとした評価を行い、その方法論を分析していくことによって、啓発のより効果的な実施につながると考えている。

A. 研究目的

近年、UNAIDS も我が国における若者の感染

拡大を危惧しているおり、このような状況のなか、医学予防と人権啓発を関連機関が協働して行うことによってより施策が効果的に進むこと

が期待される。ピアプレッシャーを効果的に取り入れる若者相互の啓発方法としてのピアエデュケーションの効果は世界的にも認められているものである。本研究では、HIVの感染予防及び人権に関する啓発を国民的レベルですすめるために、NGO・保健所・教育機関の連携のもとに行われる若者相互の啓発プログラムYYSPの評価方法について検討した。

具体的には、ワークシートという新しい側面からの若者相互の啓発プログラムYYSPの効果の評価とその評価方法の構築を目的としている。

YYSPの評価としては、この数年間、一万余名の対象者への事前・事後アンケートによる調査を実施し、本年に研究としてまとめている。しかし、単純に数やはい・いいえで回答できない質的な部分が反映されにくかったことは否めない。

HIVと人権・情報センターが実施している若者相互の啓発プログラムYYSP(以下YYSPとする)では、HIV/AIDSや予防方法という身体に関するだけでなく、さまざまな方法を使って「心」について考えるプログラムを行ってきた。今回は、感染者への「共感」を考える共生ワークを使用し、それを数値化した。それにより、本年のアンケートによる「量的」調査に加え、「質的」調査によるYYSPの評価を行った。

調査1では、共生ワークのワークシートからどのようなことを読み取ることができるのかと

いうことを6つのカテゴリーに分けて分析し、その関連性を考察した。調査2では、対象を2つに分け、それぞれにYYSPのみとYYSP+感染者との話という違うプログラムを受けてもらった。そして、共生ワークをプログラムの事前・事後の2回行い、それぞれのワークシートを比較し、考察を行った。

## B. 研究方法

### a. 調査1

#### (1) 対象

2004年度にYYSPで共生ワークを実施した専門学校1校、大学1校の2つの集団を対象とした。対象人数は専門学校生(S)26名、大学生(D)12名の合計38名である。

#### (2) 共生ワークとは

共生ワークとは感染者を具体的にイメージすることによって、感染していると想定する相手の立場になって考え、「共感」する気持ちを育むことを目的としたワークである。想定する相手を変えて3つのパターンでワークを行う。

- ① 友達に感染していることを打ち明けられたら自分はどうか、どのようなことを話すか、どう行動するか、どのようなことを思うか。反対に、どのようなことを思わないか、どのようなことを話さないか、どのような行動をしないか。
- ② 恋人が感染していることを知ったら自分は

	①肯定感	②信頼感	③自己観察	④当事者感	⑤感情表出	⑥他者との距離感
友達	友達への肯定感	友達への信頼感	自分自身	友達の立場	自分の感情表出	友達との距離感
恋人	恋人への肯定感	恋人への信頼感	自分自身	恋人の立場	自分の感情表出	恋人との距離感
自分	自己肯定感	自己信頼感	自分自身	自分の立場	自分の感情表出	周りとの距離感

どうか、どのようなことを話すか、どう行動するか、どのようなことを思うか。反対に、どのようなことを思わないか、どのようなことを話さないか、どのような行動をしないか。

- ③ 自分が感染していることを知ったら自分は  
どう思うか、どのようなことを話すか、どう行動するか、どのようなことを思うか。反対に、どのようなことを思わないか、どのようなことを話さないか、どのような行動をしないか。

以上3つのパターンで、人型の書いてあるワークシートに文字や絵など自由に書いてもらう。

共生ワークは、若者相互の予防啓発プログラム YYSP の一環として行われているので、ワークの前に知識・認識・共生などについては講話を行っている。そして、教材などを使って感染者のことを具体的に考えられるようにしている。

### (3) 調査方法

ワークシートから読み取れる「共感」の内容を6つのカテゴリーに分けた。

- ① 友達・恋人：相手のつらさや大変さを受け止めているか 自分：自分を受け止めているか
- ② 友達・恋人：相手が信頼して打ち明けてくれたことに対して感謝や喜び等の気持ちがあるか 自分：自分への信頼感が揺らがないか、自分への信頼感をもって他者への信頼感を持っているか
- ③ 自分の気持ち、行動を客観的に観察しているか
- ④ 友達・恋人：相手の立場、当事者の立場を自分に置き換えて考えているか 自分：自分が感染者としての立場で考えられているか
- ⑤ 知ったときの自分の感情をワークシートにどれだけ表出しているか
- ⑥ 友達・恋人：相手との距離感、今まで通り・少し距離をとる・離れる 自分：感染を知

ったときの周りの人間との距離感、今まで通り・少し距離をとる・離れる

### (4) 分析方法

1. 上記のカテゴリーの数値化を行う。それぞれのカテゴリーがワークシートにどのくらい表れているかを全くない(0)、少しある(1)、かなりある(2)というように点数化する。
2. 分析する者による偏りをなくするため複数の分析者が個別に点数化をする。
3. 全員の合計の平均を取り、平均値を出す。
4. 平均値は各対象者ごとに6つのカテゴリーを合計し、その平均を取った。最高値・最低値は6つのカテゴリーの点数の合計が最も高かった対象者、最も低かった対象者の値である。同じ合計数の対象者が2人以上いる場合はそれぞれを最高値・最低値とした。分析はすべてエクセルで行っている。

### b. 調査2

#### (1) 対象

2004年度にYYSPで共生ワークを実施した大学1校を対象とした。対象人数は40人で、A・Bという2つのグループに分けた。

#### (2) 調査方法

友達・恋人・自分の共生ワークを事前・事後の2回行い、比較を行った。事前は、YYSPを行う以前に共生ワークのみを行ったものである。事後は、YYSPの一環として知識・認識・共生などについての講話を行った後、実施したものである。

Aグループには以上のように調査を行った。BグループにはYYSPのなかで感染者と出会う機会を設け、その後事後の共生ワークを行った。

調査1と同様、ワークシートから読み取れる「共感」の内容を6つのカテゴリーに分けた。

#### (3) 分析方法

調査1と同様の方法で分析を行った。

### C. 研究結果

## a. 調査1

### (1) 個々のワークの結果および傾向

#### ①友達

友達である場合は総平均値(図1-1)が示すように当事者感0.4を除いてバランスが良く面積がかなり大きい。数値から見ても、肯定感1.3、信頼感1.3、自己観察1.1、感情表出1.4、距離感1.5と近似値であり、高い値を示している。大学生の2つの最高値(図1-2,1-3)は当事者感以外2.0を示しており、そのことが顕著に表れている。

#### ②恋人

恋人では総平均値(図1-4)の通り、友達と比較して面積がかなり小さくなる。最低値(図1-5,1-6,1-7)を見てみると、友達では最低値でも面積があったが、ラインになっている。なかでも、平均値の肯定感0.8、信頼感0.8、距離感1.0は友達平均値(図1-1)と比較して全て-0.5と大きく下がっている。

#### ③自分

自分になると当然のことながら当事者感2.0と高い値を示している。一方、肯定感0.2、信頼感0.4、距離感0.5とこちらは友達・恋人の総平均値よりも下がっている。(図1-8)

### (2) それぞれのワークの関連性

#### ①最高値と最低値

友達・恋人・自分のうちいずれかで最高値の対象者は他の2つでも高い値を出している。最低値も同様の傾向が見られた。

大学生の最高値は友達・恋人・自分とも同じ対象者である。(図1-2,1-9,1-10) 専門学生でも、恋人、自分で最高値の対象者は、友達でのグラフの面積が総平均値と比べて少し大きくなっている。(図1-11~1-13)

最低値では、専門学生は友達、自分で最低値の対象者が、恋人でも0.3と最低値0.2にかなり

近い値である。(図1-15~1-17) 恋人で最低値の対象者2人も、友達・自分で最低値か総平均値以下である。(図1-5,1-6,1-18~1-21) 大学生では2つ以上のワークで最低値を示す対象者は見られなかった。

以上のように、それぞれのワークの値には関連性が見られた。

#### ②全対象者の3つのワークごとの平均の比較

図1-11が示すように、自己観察と感情表出では友達・恋人・自分とも数値差は少ない。肯定感、信頼感、距離感、友達、恋人、自分と低くなっている。

一方、自分に関しては当事者感が高く、友達・恋人では当事者感はかなり低い。

## b. 調査2

### (1) Aグループ

Aグループの事前の友達・恋人・自分の平均値では、友達0.7、恋人0.9、自分1.1と高くなり(図2-1,2-2,2-3)、最高値・最低値でも同様の結果が得られた。事後の友達・恋人・自分の平均値では、友達1.1、恋人1.2、自分1.2とほぼ同じ値になった。(図2-4,2-5,2-6)

事前・事後の平均比較では、友達・恋人・自分すべてのワークで面積が大きくなった。(図2-7,2-8,2-9) 友達・恋人は、肯定感・信頼感・距離感が2倍以上になった。当事者感もわずかながら上がっている。自分は、信頼感・距離感はずかかながらも上昇が見られた。

### (2) Bグループ

Bグループの事前の平均値では、自分1.2、友達1.1、恋人0.9という順になった。(図2-10,2-11,2-12) 事後でも自分1.4、友達1.3、恋人1.2と同様の順になった。(図2-13,2-14,2-15)

友達では、わずかながらすべてのカテゴリーの値が上がっている。恋人では、肯定感・信頼

感が2倍以上上がっており、他も少しずつ上がっている。自分は、肯定感・信頼感が倍近く上がっており、もともと高い値 1.9 の当事者感以外も少しずつ上がっている。

## D. 考察

### a. 調査1

#### (1) 6つのカテゴリーの関連性

自分では当事者感はかなり高い値だが、友達・恋人では当事者感はかなり低い。肯定感・信頼感・距離感、友達、恋人との順で高く、自分ではかなり低くなっている。

上記で示されたように、友達・恋人・自分とより身近な存在になるほど受け入れることが困難であり、「共感」することがより困難になることが推測される。

#### (2) 友達・恋人・自分のワークの関連性

最高値・最低値の部分で示されたように、友達、恋人、自分のパターンには関連性があると考えられる。そのことから、いずれかの値が上がることによって、他の2つも上がる可能性が考えられる。

### b. 調査2

Aグループ・Bグループともに、友達・恋人・自分すべての平均値のグラフの面積は事前・事後で広がりが見られる。(図2-16,2-17,2-18,2-19)

AグループとBグループの比較では、大きな違いは見られなかった。感染者との出会いによる差異が今回あまり見られなかった理由として、プログラム内での短時間の出会いであったという点と、感染者と出会ったBグループの数値が事前の段階から全体的に高かった点が挙げられる。感染者との出会いによる効果については、今後さまざまな状況や方法によって検討される必要があるだろう。ただ、今回の結果から、共生ワークを含めたYYSPを行うことだけでも

十分に効果をあげることができるということが確認できた。

それぞれのワークの結果を見ると、友達・恋人に関しては、肯定感・信頼感・距離感の値が事前・事後でかなり上がっている。しかし、当事者感、事前の値がほとんど0に近く、事後もほぼ変化がない。このことから、友達・恋人のワークでは自分自身の問題としてとらえていないということが考えられる。一方、自分に関しては、当然のことながら当事者感がほぼ満点の2に近い。以上のことから、それぞれのワークを単独で行うのではなく、友達・恋人で感染者について考え、その後当事者、自分に置き換えることの重要性が示唆される。

## E. 結論

調査1では、共生ワークのワークシートを数値化することによって、対象者の心の動きというデータ化が困難なものを比較・検討することができた。それにより、対象者の感染者への「共感」を第三者にもわかるかたちで示すことができ、啓発プログラムの新たな評価測定の方法としての可能性が示唆された。調査2では、事前・事後の調査により、共生ワークを含むYYSPの「知識」だけでなく「心」の面での効果を確認することができた。これらのことから、YYSPの「心」に与える効果を確認するとともに、ワークシートなどの「質的」調査の可能性が提示できたと考える。

そして、本調査の結果から、友達のワークではその友達への肯定感や信頼感などが多く見られるが、その時点ではHIV/AIDSを自分自身のこととしては考えていない、ということがわかった。一方、恋人、自分のワークと行っていくごとに、自分の問題としてとらえることができるようになるが、自分への肯定感や信頼感、周りの人との距離感は低く、遠くなっていく傾向が見られた。HIV/AIDSを自分自身の問題とし



てとらえ、友達や恋人に対する他尊感情を自分自身への自尊感情へつなげていくためにも、共生ワークを友達・恋人・自分とより身近に、段階を踏んで行っていくことに意味があると考えられる。

他尊感情と自尊感情が結びつくことによって、相手と自分お互いの心と身体を大切に作る気持ちが生まれ、実際の予防行動につながるということが考えられる。加えて、他人事としてではなく、自分も含めたみんなのこととしての「共感」、「共生」にもつながるであろう。以上の2点は、YYSPの目的の大きな柱となっている点である。

本調査によって、今まで見えにくかったワークショップ形式の効果測定のひとつのかたちを示すことができた。きちんとした評価を行い、その方法論を分析していくことによって、啓発のより効果的な実施につながると考えている。

#### F. 健康危険情報 なし

#### G. 研究発表

○ 五島真理為：トレーニングされたボランティアの力を最大限に活用。社会運動，市民セクター政策機構，2004，296；48～49。

○ 伊藤麻里子、五島真理為、木下ゆり、ストロネルケイトリン、阿部しのぶ、塩入康史、大郷宏基、新庄文明、伊藤葉子：AIDS/HGOが実施する若者相互のAIDS啓発—全国調査の分析を通して—。日本エイズ学会総会、2004、日本エイズ学会誌，6（4）；538。

○ 伊藤葉子、五島真理為、伊藤麻里子、木下ゆり、塩入康史、新庄文明：各教育段階における若者相互のAIDS啓発プログラムの効果。日本精神衛生学会創立20周年記念大会（2004、東京）、プログラム・発表抄録集，2004，26。

○ 五島真理為、伊藤麻里子、木下ゆり、塩入康史、伊藤葉子、新庄文明：若者相互のAIDS啓発プログラムと共感に関するワークショップ。日本精神衛生学会創立20周年記念大会（2004、東京）、プログラム・発表抄録集，2004，27。

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得      なし
2. 実用新案登録      なし
3. その他      なし

図1-1 友達総平均(平均値1.2)

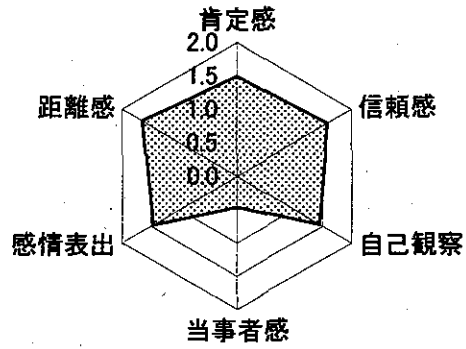


図1-2 D友達最高値①(平均値1.7)

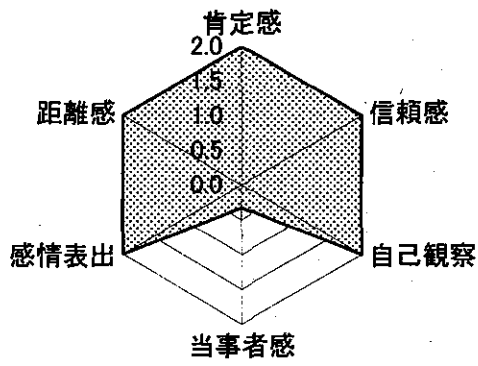


図1-3 D友達最高値②(平均値1.7)

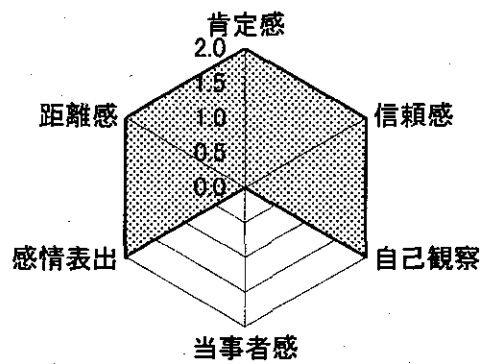


图1-4 恋人總平均(平均值1.0)

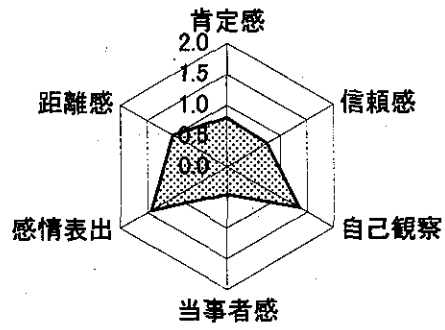


图1-5 S恋人最低值①(平均值0.2)

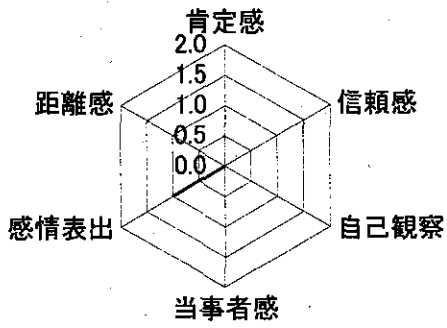


图1-6 S恋人最低值②(平均值0.2)

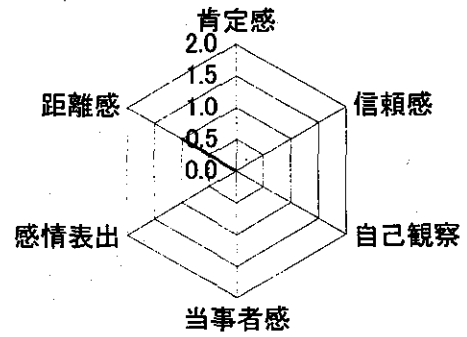


图1-7 D恋人最低值(平均值0.5)

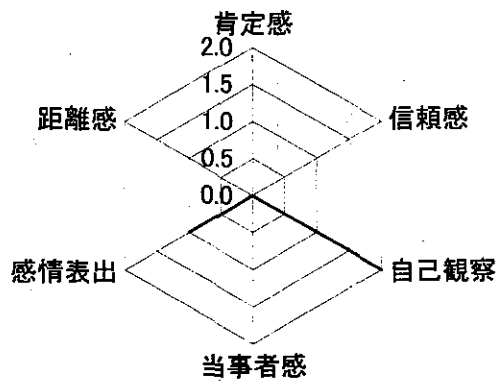


图1-8 自分総平均(平均值1.1)

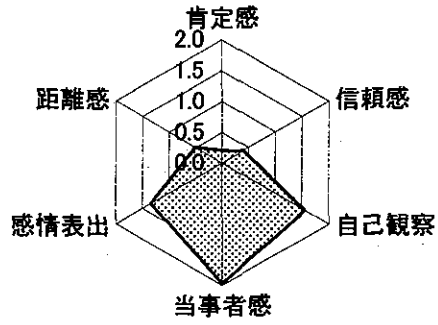


图1-9 D恋人最高値(平均值1.6)

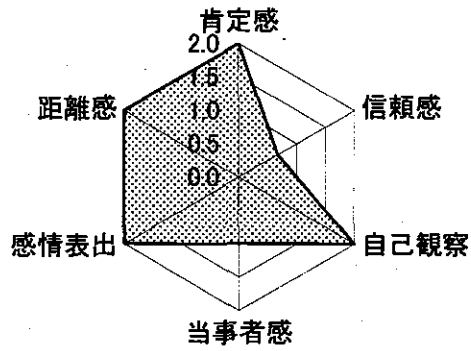


图1-10 D自分最高値(平均值1.8)

